辺地にいきる

菊地一郎

私は佐渡南部の羽茂高校で定年になった。この佐渡の中でも辺地の学校に私は前後二回、二一年間勤めた。私はこの地に生まれ、この地で人生の終章を迎えようとしている。井蛙であるが、それでも、一島一市になって今にも沈没しかねない佐渡。急速に進む小中学校の統廃合。それが佐渡の辺地の高校にも波及してきている現状を考えると、この島に生きるために行動を起こさないわけにはいかない。

市の発足（〇四年三月）まえ、六校あった高校が現在は五校。わが佐渡南部の高校は来年度から一学級減。佐渡市は広さの割に人口が少なく、しかも人口減少が加速度的に進行している（市発足当時七万人、現在六万五千人、毎年一千人減、県内の市で最も減少率が高い）。このまま経済効率優先、僻地高校切り捨てが進んでいけば、平野が少なく、辺地の交通の便が悪い佐渡では経済的理由で進学できない生徒が出るのではないかと心配である。

新自由主義とかいう、市場競争、民営化の論理が持ち込まれ、格差社会が進んだ。僻地だから都市と比べものにならないほど、経済格差が進み、一人当たりの国民所得は県下で最も低く、貧困化が進んでいる。そこへ今回の世界的不況とくれば、何をか言わんや。

この佐渡南部の後期中等教育を、この辺地の高校を、のたれ死にさせるわけにはいかない。この僻地の発展のため中等学校創立にかけた先人の熱意と努力を次世代へ伝えて、教育を守る運動に結びつけることが急務

だと考えている。

「米百俵」の故事にも劣らない、今の県立高校設立では考えられない僻地の高校創立のドラマ。寒村の住民の運動と熱意が建てた学校。今でも住民に「おいらの学校」と慕われている。この学校の創立、県立移管の事情について知っていただくことも悪いことではない。数年前からいろいろな集会で機会あるごとに訴え、今年は新潟市の同窓会でも話をする機会がもてた。僻地の小学校でも閉校になると、その集落は限界集落どころか崩壊してしまう。まして高校がなくなればその影響は大きい。この駄文では真意は伝わらないかも知れないが、ただ「おいらの学校」を存続させることが、教育を守ることであり、住民の生活を守ることだということを、少しでもご理解いただければ幸いである。

では辺地高校の創立に至るまでの過程を見ていこう。羽茂は大正の頃、第一次世界大戦による戦争の好景気の影響もなかった。そこで「羽茂村是」をかかげ農業立村を打ち上げた。昭和に入ると、世の中は一九二七年（昭和二）の金融恐慌、三〇年からの昭和恐慌（世界恐慌の波）と続き、それに冷害・凶作（農業恐慌）の追い打ちによる欠食児童や女子の身売りが続出した。羽茂は「羽茂村農業是」を制定、しかし相次ぐ経済不況から抜け出すことはできなかった。三二（昭和七）年農林省の経済更生村の指定をうけ、三三年「羽茂村経済更生五カ年計画」をたてた。これは経済更生運動であると同時に軍部の台頭による戦争準備への精神更生運動でもあった。羽茂は村の経済更生のため国の政策にのったのである。この時の「農業是」の推進と「五カ年計画」の実践から、おけさ柿の元祖、羽茂名産「㊙おけさ柿」が生産されて全国各地に販売され村は経済的にうるおった。今は県下に普及している。

一八九六（明治二九）年、佐渡に最初の中等学校が国仲の河原田に設立認可された。国仲まで遠い羽茂は八年後になって、初めて一人進学した。その後明治・大正に国仲と相川で四校設立されたが、明治の頃は年によってせいぜい一人、大正になって一～二人、昭和になって二～三人、多くて四～五人の進学であった。佐渡南部の他の地区も羽茂と変わりなかった。

明治になり学校教育が導入されると、旧羽茂、小木、松ヶ崎、赤泊、西三川の町村は南部郷としてまとまり、合同で文化活動や競技大会を開くなど交流が盛んであった。歴史の上では七二一（養老五）年、佐渡国を羽茂、

雑太、賀茂の三郡に分けた頃から羽茂郡として一つの行政区画であり文化圏であった。中世には羽茂城主本間氏（上杉景勝によって滅亡）の支配下にあった地域である。その南部郷、例えば羽茂から国仲の一番近い中等学校まで約三〇㎞もある。

（一八九七（明治三〇）年、三郡が統一され佐渡郡となる。）

一九二九（昭和四）年、佐渡は中学校・女学校で六校になっていたが、佐渡南部に中等学校が設立される前、羽茂小学校からの進学者は、三三（昭和八）年、九一人の卒業生のうち三人、翌三四年、一一〇人の卒業生のうち三人でしかなかった。ところが羽茂専修農学校が設立されると、三五（昭和一〇）年四月、最初の入学生には羽茂小学校九七人の卒業のうち六〇人（六二％）が進学した。また高等科から二年生に編入した生徒、即ち羽茂農学校第一回卒業生となった七六人の生徒のうち七五人が羽茂小学校の出身者であった。佐渡南部の生徒にとって、国仲の学校への進学は交通の便が悪いため、親もとを離れ、寮か下宿をしなければならず、向学心に燃えながらも、経済的理由で進学をあきらめなければならなかった生徒も多かった。

「子どもや村の将来のため地元に中等学校がほしい」とは羽茂村民の長年の夢であり、願望であった。それが厳しい経済更生運動のなかで改めて問われた。農業を基幹産業として村づくりを進めていくなかで当時の村長本間瀬平は「村づくりは人づくり」と、この不況の打開と羽茂の生きる道を人づくりに賭けたのである。彼は一九三一年村長になると専修農学校の校舎建築の基本金の積み立てを始めた。三四（昭和九）年村議会は実業補習学校と青年訓練所を統一した形の専修農学校の設立を決議。同年、県に設立が認可され、一〇月に開校した。ところが翌三五年四月、青年学校令が公布され、それに乗っかる形で同月五日、専修農学校本科を開設した。そして同月八日羽茂小学校を仮校舎として開校。さらに翌三六年三月羽茂農学校（乙種）が認可されたのである。

専修農学校設立決議の段階から議会では財政問題で賛否両論、激突した。がしかし決議の段階では満場一致で可決されている。それは村民の要望実現のため、内務省の特別許可をうけて、制限外の税負担をしても学校を建てよう、ということになったからである。予算書でみると、税としてすでに九九二一円徴収、さら

に三四〇〇円を追加徴収する。次に基本金から一四八〇〇円をとりくずして使用するなど、その上一般寄付金まで募って創立にこぎつけたのである。この年は県からの補助金はまったくなく、開校により維持費、教職員の給与も必要であったし、何よりも校舎建築が必要であった。

前に述べたように羽茂農学校の設立は、羽茂は勿論、佐渡南部の進学率を大きく様変わりさせた。この人づくりは村長の指導力と村民の努力の結果、一応成功をおさめた。しかしその裏では、その後二〇年に及ぶ厳しい財政状態に耐えなければならなかった。今年の佐渡市の教育費は予算の一〇％であるが、かつて羽茂村では予算の五三％を教育関係費に計上した年があり、「米百俵」に負けない教育に対する熱意が感じられる。がしかし羽茂農学校の設立は小・中学校へのしわよせや村民の生活に大きな負担になっていた。とくに四三年の甲種への移行、四七年県への移管のときなど、大変だったようである。

校舎は三五年に竣工。作業所、畜舎、肥料舎の付属建物は翌年にかけて一応整った。さらに七年後、敬神道場が建てられ体育の授業にも使用された。それまでは朝礼は小学校への渡り廊下、体育は小学校の体育館を借りての授業であった。苦労は村だけでなく、生徒も明るい希望のなかで厳しい船出だったのである。

戦時中は軍事教練に狭いということで、同窓会・生徒の勤労奉仕でグラウンドを拡張した。県に移管のさいは県立高校水準の設備が必要であるとして、各集落へ税外寄付金の割り当てや一般寄付で一〇〇万円を集め、いわゆる持参金をもって県に移管されたのである。勿論、財政面だけでなく、多くの人の運動や協力があってこそ県立になったと言われている。

四七年、県立になった年、六・三・三制の学制改革が実施され、新制中学校の校舎が必要になったが、村の財政逼迫で県に移管されたばかりの羽茂農学校に併設中学校をつくり、独立の中学校は一年遅れた。体育館などはその後一〇年も小学校と共用だった。

ここに、六三(昭和三八)年高度成長の頃に調べた、新制中学校が設立されてから一五年間の進学率がある。羽茂中八〇％、小木中五五％、赤泊中六三％(近くに羽茂高赤泊分校)、佐和田中七八％(近くに佐渡高)、内海府中三六％(佐渡最北の中学校、バス通学不可)、であり、これを見るとバス通学が出来ない地域は進学率が低い。

今年の羽茂中、小木中は全員進学、赤泊中は一人を残して進学、今の羽茂高校生のほとんどが佐渡南部地区から通学している。ちなみに今年の全佐渡市の進学率九九・三%、全国（〇八年）九七・八%であった。この数字を見ると長年歯を食いしばって苦難に耐えた、羽茂住民の努力が報われたのである。創立以来七〇余年、戦争・敗戦・復興と混乱のなかで、学校と地域一体となって、ここまでたどり着いたのである。これを後戻りさせてはならない。

この頃、辺地の小規模校では教育効果が上がらない？と閉校し、教育改革の名のもとに職員会議を名目だけに棚上げし、指導の名のもとに教室を回って教科担任の授業にまで干渉するときく。一方教師を競争と命令で身動き出来ないように管理してきているとか。教育基本法の改悪の成果がここまできたということか。今や佐渡の教育ばかりでなく、教育界が危機的状況と言わなければならない。憲法に保障された「ひとしく教育を受ける権利」「教育の自由」はどうなったのだ。「国民の教育権」などは今や語れなくなったのか？

戦争の犠牲のうえに制定された憲法まで、ねじ曲げられようとしている。平和と民主主義のために、辺地の住民もひとしく教育を受けられるために、この辺地の高校の存続と発展に微力ながら努力したい。残された人生、そのためにも精一杯生きたいと思っている。

（きくち　いちろう・佐渡市）

日本の知識人の警鐘

やや古い話だが、岩波書店のPR小冊子『図書』の〇八年十一月号に、「岩波新書創刊七十年」を記念して各界著名人に「人に勧めたい新書は何か」を問うたアンケートの結果（二一八通）が発表されていた。一位は丸山真男著『日本の思想』だが、このベストテンのなかには大江健三郎の『ヒロシマ・ノート』（六位）と『沖縄ノート』（十位）の二点が入っている。

岩波書店では07年、岩波文庫のなかから「今日なお心に残る私の三冊」を著名人にアンケート（二三二通）している。それによると一位は『きけ　わだつみの声』であった。このアンケートは十年ごとに実施されており、十年前のベストワンは九鬼周造『「いき」の構造』であり、二十年前は中勘助『銀の匙』であった。『きけ　わだつみの声』が一位になったことに編集部は「「憲法改正」の動きが伝えられる今日の状況と無関係ではない」とコメントしている。

日本の良識ある知識人の警鐘に注目したい。（大）